
王子の落とし方

優千

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子の落とし方

【Nコード】

N4867Y

【作者名】

優千

【あらすじ】

ある日、ごく普通の女子高生 藤咲真琴とその幼なじみの奥村康介（こむすけ）が通う高校に、転校生 水城涼（みずきりょう）がやってくる。

真琴の失言で転校早々妙なあだ名がついてしまい、平穩に過ぎるはずだった理想の高校生活を見事に打ち壊された涼が真琴を許す条件として出した要求とは…？

真琴と涼が繰り広げる波乱万丈ラブコメディー！

第一章 王子到来

——人形なのではないだろうか。

瞬時にそう思った。

もしくは俳優、モデル、アイドル、e t c……。

いや、それよりもっと優美さに溢れ、それでいてどこか儚げな表情さえも見え隠れさせる…俗に言う、なんて言ったっけ ほら、お伽話なんかに出てきそうな…

「王子…」

こんにちは皆さん。

私は地元のごく普通の高校に通う、これまたごくごく普通的女子高生。

名を、藤咲 真琴と申します。

いきなり突飛すぎる話をするのはどうかと思いますので、私が
朝目覚めた時から順を追ってお話しいたしましょう。

…なんだろう、不快、
てゆうのとは違う、妙な感じ…

………っ 苦しいー！

そう感じると共に目を覚ました私は、未だに残る眠気にぼんやりと身を任せる。
………が、やはり苦しい。

「………っ ぶはっー！」

「………お。やっとお目覚めか？」

声の主が、先程私の鼻をつまんでいたであろう指で今度は私のおでこに容赦ないデコピンをくらわせた。

「い、痛い…なんなのよお康介…」

寝起きの私はもごもごと目の前の人物に文句をたらす。

おでこを摩りながら、むくりと重い身体を起こしてもう一度その人物を見やると、呆れた微笑みを返された。

「何って、いーのか？もう8時だぞ。」

「はあ…？それがどーしたの……」

ちよつと待つて、8時……8時！？

壁にかけられた時計に目をやると、確かに8時1分を回った頃だった。

「ちよつとーっ！…！何で早く起こしてくれないの！？」

起こしてもらっておきながら大声で文句を吐きつつ、ベッドから飛び出して支度を始める。

「先行つとくぞー」

そんな言葉をどこか遠くで聞きながら大急ぎで支度をすまし、

追いかけるように家を出た。

「康介―後ろ乗せてってーっ」

そう言つて半ば強引に自転車の後ろにまたがると、自転車は気持ち良い春の風をきつて走り出した。

数分後見えてきたのは見慣れた学校。

私はこの学校の1年…もとい、今日から2年生になる。

「ふー…間に合ったね。」

「俺のおかげだな。」

自転車を留めながら話すこの男。
名を、奥村 康介という。

サラサラとなびく艶のある黒い髪。
しかし執拗に伸ばされたわけではなく。
一重で切れ長の目。

一歩間違えれば目付きが悪い、と言えるだろうが、彼の場合は優しい瞳と表情がそれをうまくカバーしている。

朝目覚めたらそこにいて？

仲良く二人乗りで登校？

拳げ句の果てにはじゃれ合いながら校舎に向かう？

カップルですか。

いいえ、違います。

康介と私は、家が隣同士ということもあって赤ちゃんの時から一緒に過ごしてきた。

お互い一人っ子なので、それはもう兄妹のように。

そのうえ、幼稚園年少さんから始まって小、中、高校1年生とずっと同じクラス。

ここまでくると運命通り越してもはや呪いなのではないだろうか。いや、そうに違いない。

「康介、今年もあたしら一緒なのかな？」

「どーだろなあ……」

人だかりを掻き分けてクラス表を見ると、やはり私の勘は的中した。

2 - A 3 番 奥村 康介

2 - A 3 0 番 藤咲 真琴

「呪いだ…」

「はあ？」

一人青ざめている私に、隣の康介は呆れた表情を浮かべている。

「まあ今まではともかく、高校で同じクラスなのは仕方ないだろ」

「そうだけど…」

そうなのだ。

我が校のクラス分けは、成績順となっている。

私は文系、康介は理数系。

お互いの得意分野をお互いに教え合い、今までやってきたのだ。それに加え私も康介も運動神経では文句なし。

同性にだったら負ける気がしない程なのである。

そんな私達はいつも成績トップクラス。

テストの順位発表ではいつも二人で一位二位を争っていた。

「あれ…？」

クラス表を見てある違和感を覚えたが、すでに教室へと足を運ぶ康介に気付き後を追った

「おはよ〜」

ガラツとドアを開けて教室に入ると、これまた代わり映えのないクラスメイトが待っていた。

「おはよ、まこ♪今年も一緒だね〜」

「もーいい加減このクラス飽きたよ…」

「いやいや、どういう意味だよそれ!」

いつも通り会話をしていると、思い出したようにクラスメイトが声を上げた。

「あ、あの、さっきね、B組の子が奥村くんのこと呼んでたよ」

「俺?」

「う、うん、これ渡して欲しいって…」

そう言って少し怯えたようにおずおずと差し出したのは、一通の手紙。

康介はそれを見て一瞬眉をしかめると、なんとも言えない冷たい表情で席に着いた。

「ちょっと康介…」

私が呼び止めると、視線をそらして頬杖をついた。

「いらね。捨てといて」

その言葉に、またか…とクラス全員が溜め息をついた。

康介は、正直言ってモテる。

幼なじみの私からしたらよく分からないけど、周りから見たらカッコいいらしい。

しかし康介は他クラスの女子はおろか、同じクラスの女子にさえ笑顔を見せたことがない。

はつきり言うつと、態度があからさまに冷たいのだ。

私と二人の時は時折笑顔を見せるのだが、他の女の子の前ではさっぱり。

告白された時も、さつきみたいに冷たくバツサリ振ってしまう。

康介いわく、どうも女の子は苦手らしい。

むしろ嫌い。面倒。

など、康介に告白した女の子にはちょっと悲惨な言葉を以前私の前で述べていたのを思い出す。

「じゃあ私は？」と聞いたことがある。

彼、なんて言ったと思います？

「お前女じゃねーし。」俺ん中で。

と付け加えながら馬鹿にしたように微笑んだのだ。

とは言うものの、私だって康介を男として見るなんて言われても、無理だ。

康介は男でも女でもなく、康介なのだ。
本当に血の繋がった兄妹としか思えない。

だからこそ、今までなんの意識も警戒もせず一緒にいたんだと思う。

「あんだねえ……」

康介に文句をつけようとした瞬間、チャイムが鳴り響いた。

「おーおー今年も代わり映えしない顔揃いだなあ」

教室に入ってきた担任が、嬉しいような呆れたような表情を浮かべて、出席確認を終える。

「そんな我がクラスに、転校生がやってきた！」

”転校生”という部分をいやに強調して満足げに微笑む。
私は、先生のこのドヤ顔とも呼べるあほ面が好きだったりする。

あらあら、今日もダサイネクタイしちゃって。

ああ、そーいえばクラス表の違和感は見知らぬ転校生の名前があつたからなのか…。

なんて、どーでもいいようなことを考えていた私の思考回路は、ここでストップした。

「おい、入れー」

ガラッとドアが開き、一人の男が現れる。

「水城 涼です」

そんな自己紹介の言葉をばんやりと聞きながら、彼の姿に釘付けになる。

ふわりとなびく栗色の髪、形の整った鼻。
白い肌に映える血色の良い唇が印象的だ。

でも、それよりも、
長い睫毛に縁取られた涼しげで凜とした瞳に、
なにかも包み込ま
れそうになった。

教壇のうえでにこりとはにかみながら自己紹介をするスラリと
した男は、”完璧”そのものだった。

「王子……」

いつのまにか発してしまっていた言葉に、
クラスの女子一同が
「それだ！」と言わんばかりに一斉に振り返った。

水城くん…申し訳ない。
その瞬間から彼のあだ名は”王子”になったのだった。

謝罪の末に

「ねー王子くんどこの高校から来たの〜？」

「その髪自毛？綺麗だねっ」

「王子くん家どの辺なの〜？」

休み時間になると、クラス中の女子が水城君に群がり、彼を”王子”と呼んだ。

「俺、水城なんだけど…」

なんとも心苦しそうに呟く哀れな美青年。

その原因を作ってしまったのは、他でもない、私なのだ。

「ちょ、皆、水城くん困ってるじゃん！その呼び方辞めなよ……」

私が止めに入ろうとするものの、一向に辞める気配はない。

「てか最初に王子って言ったのまじじゃん」

そーだそーだと、他の子達もケラケラ笑いながら返す。

むむむ… 本当のことだから何も言えない…。

その後も、うちのクラスに留まらず他クラスの女子にまで散々王子と持て囃され、日に日に水城くんはげんなりとしていく。

しかしさすが王子水城くん。

王子と誰かに呼ばれれば、優しげな表情を浮かべ、困ったように微笑んで手を振る。

その紳士的な振る舞いから、2年に留まらず1・3年の女子にまで”王子”というあだ名が急速に広まっていった。

そんな痛々しい姿を遠巻きに見つめながら、私は心底申し訳ないと思うのだった。

そんな状態で1週間とちよつとが続いたある日、事件は起きた。

「真琴、帰るぞ」

終礼が終わっても席を立たない私に、康介が歩み寄る。

「うん…」

「お前だけが悪いわけじゃないだろう？ あんま落ち込むな。」

そう言つて私の頭をポンポンと軽く叩く。

「…うん。ありがとう。」

康介に元気付けられ、席を立って帰ろうとした時に私の前に誰かが

立ち塞がった。

「水城…くん。」

「あのさ、担任の先生が社会科資料室に来てって言ってたよ？」

水城くんはいつも通り優しげな表情を浮かべ、にこにこ私に伝えた。

……なんて優しい人なんだろう…っ！

水城くんをあんな目に合わせた私に対してまでこんなに優しいそぶり…！

さすが王子！

ううん、もはや神！仏！

なんて馬鹿みたいなことを考えながら、「ありがと」と軽く頭を下

げて資料室に向かった。

資料室。

名前の通り社会科の資料や机が散乱しているだけで、先生の姿は見当たらない。

不思議に思っても、窓から差し込む夕方の気持ち良い日差しに負けて近くの机に突っ伏して睡魔に身を任せた。

……い

「おい……」

いきなりの大声に飛び起きると、目の前には王子…もとい、水城くんがいた。

「…………はい…？」

なんとも間抜けな声で返事をしてしまったことに羞恥を覚えるが、異変に気付く。

…………”おい”？

…あの水城くんが？

いや、紛れもなく今の声の主は水城くんであろう。

目の前の水城くんは、さも人を見下したような、怒っているような今までに見たこともない表情をしているのだ。

「水城…くん？」

「…お前さ、呼び出されて寝る？普通。」

馬鹿じゃねえの？とポケットに手をつ込んで悪態をつく”王子”に、驚きの色を隠せない。

「あの…あのさ、どうしてくれるの？」

私の言葉を遮るように言葉を放つと、側にあつた椅子に腰かけ、脚を組んだ。

「俺さ、前の学校でも今みたいに騒がれてうんざりしてたんだよ。だから転校して今度こそ普通の高校生活送ろうと思ってたのに…あなたのせいでぶち壊した。」

ひいひいひいっ…!!

あの水城くんが親の仇を見るような目で私を…!!

「ご、ごめんなさい！つい、思ったことが口に…本当にごめんなさい！」

「謝って許されるか！」

「ななな、なんでもするから！」

その言葉に、水城くんがぴくりと反応する。

「…なんでも？」

「う、え、その…」

怪しい笑みを浮かべて私に迫り来る水城くんを前に、嫌な予感がしてならない。

「そういえば俺さあ… 周りから王子とか言われてうかつに女に手も出せないんだよなあ…」

そう言いながら私を壁に追いやると、私の顔の横に両手をつく。

「いわゆる、欲求不満ってやつ？」

フツと口元に嫌な笑みを作ると、私の顎に手を添え、親指で下唇をなぞる。

「…っ!？」

顔を真っ赤にして驚く私を見て、より一層不適な笑みをこぼすと、静かに囁いた。

「…………—お前で我慢するか」

瞬時に距離が縮まったと思った時には、もう遅かった。

彼の唇によって押し付けられるように塞がれた唇。

今まで経験したことのないその感触に、背筋にゾクリと寒気が走る。

ゆっくりと離れると、彼の目は虚ろに私の唇を映し、さっきと逆の方に顔を傾けた。

そんな慣れた動きの中我に返った私は大声で叫ぶ。「ぎゃあああああ
あああっ——！」

…叫んだ。

と、同時に、息継ぎもせずにかくし立てた。

「最つつつ低!!何してんの?ねえ、何してんの!?意味わかんないんだけど!!欲求不満?知らないよあんたの性欲なんか!!だいたいさあ王子呼ばわりされんのが嫌なら断りやあいじゃん!調子のつてへらへらしてたあんたが悪いんでしょう?意味わかんない理由で私のファーストキス奪わないでよ!!」

はあはあと息を切らす私と、突き飛ばされてしりもちを付きぽかんと口を開けてる水城くん。

「ファーストキスって…」

ぶはつと吹き出して一通り笑い終えた後、私に視線を向け、嘲笑うかのような笑みを作った。

「ファーストキスはとうだった？」

「……最悪」

その言葉を聞き、ハッと鼻で笑うと、立ち上がり再び私との距離を詰めた。

「じゃあ何、あんたの最高のファーストキスってどんなんだよ？」

一歩、また一歩と歩み寄る。

「そんなの…好きな人とするキスに決まってるでしょ！」

最後の一步を踏み終わると、私の両肩に自身の腕を置いた。

「じゃ、俺を好きになればいいじゃん。」

悪びれもなくひょうひょうとした態度を取る男に、殺意さえ芽生え始めると、その両腕を振り払った。

「冗談でしょ？誰があんなにか…「賭けてもいいよ。」

またもや私の言葉を遮るように言い放つ。

「この世で俺に狙われて惚れない女なんていない。」

「何言ってるの？馬鹿じゃない」

「俺、これから毎日あんに付き纏うから。」

何言ってんだコイツ…いやいや、何言ってんだコイツ!?

「ちょ、冗談じゃないわよ! あんたなんかにつき纏われたらあたしまで何言われるか…!」

「あんたが先に俺を落としたら今回の件は許してやる。そのかわり…」

そこで言葉を止めると、あたしの髪をすくい上げて口づけた。

「あんたが先に俺に惚れたらあんたの”初めて”貰うから。」

…初めて…初めてって!?

ボツと顔を赤く染めた私を見てくすつと笑うと、私から距離を取った。

「意味は分かったようだね。」

「ちょ、待ちなさいよ！そんなの無理に決まって……」

「無理……そつか、無理だよなあ……お前みたいな凡人には。」

カチン

と、きた。

いや、切れた。

「凡人……ふざけんじやないわよ！凡人だからって舐めないでよね！」

そう言っでビシッと奴の顔に人差し指を突き出し、そして

「あんたなんか……私にメロメロのベロンベロンにしてやるわよ……！」

そう言い放つと、勢いよく資料室を後にした。

「メロメロのベロンベロンだと……？……望むところだ。」

私のこの言葉がきつかけに、波瀾万丈な高校生活が幕を開けようとはこの時の私は思いもしなかった。

男と女の違い

「最悪だ…」

あれから家に帰った私は、枕に顔を埋めながら自分がしでかしてしまった過ちを思い出していた。

なんて賭けをしてしまったんだろう…。

あんな賭け、勝てるはずがないのは分かりきっていたのに。私はひよっとして馬鹿なのか？

いや、ひよっとしなくてもこれは完全に…

「馬鹿だ……」

「誰が？」

ふいに声が聞こえて、自然とそちらに顔を向ける。

声の主は、私が倒れ込んだベッドに背を預けて小説を読んでいた。

「康介、来てたんだ？」

「ああ、１０分前ぐらいにな。」

康介は読んでいたページにしおりを挟むと、パタンと小説を閉じた。

「で？誰が馬鹿なんだ？」

そう言いながら振り返って、組んだ両腕をベッドに預ける。

「誰がつて…あたし？」

ははっと自嘲したように笑うと、康介は眉をしかめた。

「何、なんかあったのか？」

言おうか言うまいか迷ったが、康介に無駄な心配をかけまいと曖昧に微笑んで見せた。

「水城のことなら気にすんな……」

康介は、”水城”という名前にギクツと反応した真琴を見逃さなかった。

ベッドに預けていた身体を持ち上げ、未だに枕に顔を埋める真琴を無理矢理起き上がらせる。

そのままベッドに座らせると、自分もベッドの淵に腰掛けた。

「やっぱあいつがらみか。」

「…なんでもないってば。」

まさか王子だと思っていた人物が豹変して黒王子になったただとか
なんでもするなんて馬鹿なことを言っていきなりキスされたとか
勢いで自分の処女を賭けた勝負を受けてしまったなんて、言えるは
ずがない。

「…まあいいや。なんかあつたら言えよ?」

そう言つて私の頭をポンポンと撫でると、康介は放置していた小説
を読み出した。

「…自分ちで読みなよー。」

私は子供みたいに膝を抱え込んで康介を見る。

「んーあと5ページ。」

翌朝、珍しく私は早起きだった。

…もとい、一睡もしていなかった。

康介が帰ったあとも悶々とあの賭けのことを考えていたら、いつの
間にか朝になっていたのだ。

「ううー…黒王子め…。」

眠たい目をこすりながらも身支度を終えると、ふと鏡に映る自分の唇に目がいき、無意識に指を添える。

ファーストキス…しちゃったんだよね。

生々しく蘇るその感触に軽い目眩を覚えつつ、部屋を出た。

玄関で履き慣らしたローファーを履き、全身鏡で身だしなみをチェックすると「行ってきました」と小さく言って家を出た。

「おはよ、まこ。」

「……………」

私は開けかけたドアを閉め、鍵をかけてチェーンまでかけた。

「なんで…ここにいるの……！？」

黒王子が…。

そう心の中で呟くと、ドアが叩かれた。

「おいおい閉めんなよ…なあ、おい聞してる？まこ…。」

ちょ、怖いつて普通に…！

どうやって家調べたの？

意味わかんない…

未だに叩かれるドアと、呼び掛ける声に混乱しながら、私はある逃げ道を思い出した。

とりあえずドアのチェーンは外して（帰ってきて入れないからね。）
、勢いよく階段を上がると自分の部屋に駆け込んだ。

そのまま窓に向かって一直線に歩み寄ると、カーテンを開ける。

…と、窓を開けようとする手を思わず止めた。

「…………え？」

目の前には、口元に人差し指を添えた康介がいた。

私と康介の部屋にはベランダがあつて、お互いいつもそこから行き来している。

そこに、今いるはずのない康介が当たり前のような顔をして立っているのだ。

カラリと窓を開けると、康介がふつと笑みを漏らす。

「どうして…」

「とりあえずこつち来い。」

康介は私の腕を掴むと、自身の部屋に入った。

カラリと窓を閉め真琴に向き直ると、腕を組んで窓にもたれた。

「…で？話せよ、ちゃんと。」

普段の優しさを覗かせる瞳とは打って変わって、射るような目つきで私に視線をむける。

その態度に観念した真琴は、視線を落として話しはじめた。

「…昨日——」

一通り話し終えると、康介の様子を伺うように顔をあげる。

すると康介はより一層重い空気を醸し出していた。

「…お前さあ馬鹿じゃねえの？」

そう言つて怪訝な表情をあたしに向け、溜め息をつく。

「だって…あの時はキレちゃってて勢いで、っていうか…」
「勢いで賭けていいようなもんじゃねえだろ。」

言い終わりに被せるように、康介が少し声のトーンを下げて言った。

こんなに機嫌の悪い康介を見るのは初めてで、どうしたらいいか分からずにとりあえず明るく振る舞おうと試みる。

「で、でもさあつ 実際あたしが惚れるわけでもないしさ、ね？何かされたら昨日みたいに突き飛ばして逃げたら…」

そう言った瞬間

康介に腕を掴まれたと感じるやいなや、私の視界が反転した。

全てがスローモーションのように見えて、自分が押し倒されているのだと気付くのに数秒がかかった。

何故か康介のベッドに横になっている自分と、その顔の横に両手をついて見下ろしている康介。

「ちょ、何…」

「突き飛ばして逃げてみるよ。できるんだろ？」

馬鹿にしたようにそう言われてカッとなった私は、手足をばたつかせようと試みる。

が、いつの間にか私の両手は康介の両手によってベッドへ縫い付けられ、脚には康介の脚が絡められてうまく動けない。

私は今、康介の全身で押さえ付けられている状態だ。

「ね、康介…痛いから、」

「…だから？」

冷たい目でそう言うと、私の両手首を左手だけで封じ込んだ。
自由になつた右手で私のブラウスのボタンに手をかける。

「ちょ…康介え…」

初めての状況が作り出す恐怖に堪えきれなくなつた私は、思わず涙をこぼす。

「…バーカだから言わんこつちやねえ」

康介は私への拘束を全て解くと、私の頭を撫でて優しく言い聞かせるように話し出した。

「今の俺が水城なら、お前どうなつてた？」

「……。」

「いいか、お前は女なんだ。いくら威勢がよくても。女が男に力で勝てるなんて二度と考えるな。」

私がべそをかきながら頷くと、もう一度頭を撫で、ふつと笑みをこぼす。

「安心しろ。今のはちよつとした忠告だ。言っただろ？お前は俺ん中ではただの妹みたいなもんだ。」

「当たり前じゃん…。」

「俺がお前なんか抱くかよ」

そう言つて私にデコピンをくらわせると、通学鞆を拾い上げて私に渡した。

その後遅刻ギリギリで登校した私達は、いつも通りケラケラと会話しながら教室に入った。

すぐさま水城へ鋭い視線を向けた康介の腕を引いて引き止める。

「…なんだよ真琴。」

不満げな康介に、私は余裕の笑みを見せる。

「心配しなくても大丈夫だよ。要はあいつを好きにならなければいいんでしょ？」

そんなの余裕。と呟くと、康介の背中を軽く叩いた。

「あんな奴、あたしにメロメロでベロンベロンにしてやるわ。」

そう言つてふふんと鼻を鳴らす私を見ると、康介は私の頭を撫でて席についた。

すかさず、王子…もとい、黒王子が微笑みながら私の側にやってきた。

「奥村…だっけ？付き合つてんの？」

相変わらず周りにはニコニコと笑顔を振り撒きつつ、小声で私に問う。

「はあ？ないない。康介とあたしはただの幼なじみだよ。」

「ふーん…ところでさっきはどーやって家から出たの？」

探るようなその目に、先程の康介との出来事を思い出して私の顔はみるみるうちに赤くなつた。

しまった、と気付いた時にはもう遅く、私の目はやりと怪しい笑みをこぼす黒王子をとらえていた。

「…あつれゝ顔、赤くない？」

「なっ…」

「お前もしかしてあいつのこと好きなの？」

そう言つてにやにやする黒王子を前に、ふと我に返る。

「いや、ない。」

私の”ない”と同時に背後から同じ言葉が発せられた。
不思議に思いふりかえると、そこには呆れ顔の康介。

「何馬鹿な話してんだよ……」

「えーだってこいつが。」

「まあたまたあゝ照れ隠しかよ」

私と康介の会話を阻むように黒王子が口を出すと、2人してきょとんと顔を見合わせる。

「いや、だってあたしら生まれた時からずっと一緒だよ？」

「今更恋愛感情なんか生まれるわけねえよな」

いかにも”当たり前じゃん？”というような表情を浮かべると、黒王子はさも面白くなさげに席へと戻っていった。

私からしても、こうもお互いに恋愛感情を一切持たない異性がいるのは極めて珍しいと思う。

男女の中に友情は芽生えないと断言する人間もいるが、しかし私と康介に至っては芽生えるも芽生えないも兄妹同然なのだから仕方がない。

実際子供のころには一緒にお風呂に入って同じ布団で寝た仲だ。

今更恋愛感情も糞もあるかって話である。

そんなことを考えているうちに、一時間目の授業が始まった。

一番窓際の、一番後ろの席。

この教室一番の特等席だなあとぼんやり外を眺める。

ふと人影を感じて視線を落とすと、校門の方から一人の生徒が歩いてくる。

遅刻か…？

ふと目が合うと、美しい容姿があらわになった。

ミルクティーのような色のふわふわとしたくせ毛をなびかせる、かなりの美形。

その容姿に似合わず、服装はカッターシャツの上にだぼつとした黒

いパーカを羽織り、学生ズボンに、ブラウンの大きめのブーツ。

なんともらふな格好だが、基本私達の学校は服装自由なので。

見えなくなってしまった美形を少し名残惜しく思いながら、いつのまにか私は睡魔に身を任せていた。

男と女の違い（後書き）

なんか一話一話が短めなので次話から少し長くしてみようと思います（^^）！

幼馴染の真実

「おい、真琴」

ふいに名前を呼ばれて目を覚ますと、既に一時間目の授業が終了していた。

ようやく寝ばけも覚めてきた頃、ミルクティー色の美青年のことを思い出す。

夢……か。

夢に違いない。

あんな日本人離れた美青年がこんなところにいるはずがない。

「何ぼーっとしてんだよ？」

隣の席の康介が怪訝な顔を私に向ける。

「んー…うつん。なんでもな…」

言いかけた言葉を途中で止めた私の視線は一点に注がれる。

それを不思議に思ったのか、康介もそちらへ目を向ける。

「…ああ、あいつ？水城と同じ日に3-Aに転校してきたらしいな。」

二人が同じ日に…？

そう言葉を漏らしながら、教室の入口で親しげに会話する二人に視

線を戻す。

その視線に気付いたのか、ミルクティー色の美青年がこちらに顔を向ける。

少し不思議そうな表情を浮かべたかと思うと、思い出したかのように「ああ、」と声を漏らすと、こちらに歩いて来た。

「君、さっき目合った子だね」

へらつと軽そうな笑みを浮かべたものの、その顔すら美しく整って見える。

色素の薄い髪に、同じく色素の薄い瞳。

おまけに素晴らしく白い肌を持ち合わせた容姿は、本当に日本人離れしている。

「俺、水城聖ってゆうの。神聖の聖って書いて、ひじり。よろしくね？」

「あ、はい。藤咲真琴です。よろしく…」

…え、ちよつと待つて。

今”水城”って言った…！？

「ああ、うん。俺ね、涼のお兄ちゃんなの。」

まるで私の心を読み取ったかのように答え、ふふつと笑みを漏らす。その顔がまた実に美しくて。

しばらくほう…と見とれていたが、はつと我に返る。

「えつと…水城さんは水城くんのお兄さん…てことは、兄弟…」
「やだなあ、聖でいいよ。」

ニコツと笑みを浮かべて水城兄、もとい 聖くんが言うと、黒王子が自分のことも下の名前で良いと口を挟んだ。

ぶっちゃけ下の名前で呼ぼうが呼ぶまいがどうでもいいのだが。

兄弟とは言うものの、どこからどう見ても似ているとは言えない容姿に疑問を抱きつつ口にする。

「似てないんですね、あまり。」

私の率直な言葉に二人は目を丸くするも、「そう?」と言ってごまかすように曖昧な笑みを浮かべた。

「ところで真琴ちゃん、もしかして彼、君の彼氏?」

聖さんはそう言うと、康介の方に視線を移した。

「ああ、康介は幼なじみですよ。」

「幼なじみ…こんなかつこいい男の子が傍にいて好きになっちゃったりしないんだ?」

「ないでしょ。だって兄妹みたいなもんですからねえ」

私が言うと、康介も「ああ。」と肯定の意を示す。

「でも幼なじみだったら同じ部屋にふたりきりになったりするんですよ?」

「まあ日常茶飯事というか…。」

「こんな可愛い子が無防備に隣にいたら押し倒したくなっちゃうでしょう?」

「ああ、男の本能ってやつな。」

水城兄弟がにやにやと笑みを浮かべながら康介をつつく。

「はあ… そんなもんですかね？ 俺、こいつが隣で腹出して寝てよーが何も感じませんけどね。」

康介が目を丸くして当然のこのように言う。

まったく失礼な男だと心の中で悪態をつきながらも、本当のことだから言い返せない。

康介と私はそれはもう毎日のようにお互いの部屋に入り浸っている。それこそたわいもない会話をしたり、勉強を教え合ったり。

一緒にいることが当然なのだ。

そのまま二人で同じベッドで寝たところで、何ら不思議なことではない。

けど、どちらかに恋人が出来た時はやっぱり今の生活を続けるわけにもいなくて。

過去の恋人にも散々色々言われてきた。

それが面倒で、最近ではめっきり恋人を作る気力すら失った私なのだが…

「そつえば康介って彼女作らないよね？」

私が今まで疑問に思っていたことだ。

康介は私の知っている限り、彼女が出来た事がないはずだ。

「ああ、俺には手のかかる妹がいるからな。」

おちおち彼女も作れないと言ってふつと微笑んだ。

手のかかるって… つくづく失礼な男だ。

そんな会話をしているうちに予鈴が鳴り、聖くんは自分の教室へと帰っていった。

「しっかし美形兄弟だったねえ」

「何、お前もあーゆーの好きなんだ？」

ふつと小ばかにするように笑うと、手元の小説に目を戻す。
夕食後昨日とは変わって今日は康介の部屋で二人、暇を持て余していた。

「まあ美形は嫌いではないかな。」

そう言つて、ベッドに肘をついて横になりながら小説を読む康介に振り返る。

「今日の話だけどさ、康介彼女作っていいよ？」

「何だよ急に？」

康介は驚いた様に視線だけこちらに向ける。

「だってあたしのせいで康介が一生独り身とかなんかやだし。」

「そうだな…お前に男が出来たら考えるよ。」

そう言つて私の頭を撫でる様子は、まさに兄と妹の光景だ。

「何兄貴面してんのよー」

「むしろ親代わりと言っても過言ではないだろ。」

呆れたように正論を言う康介に、何も言えなくなる。

私の家は、はつきり言っただけ普通の家庭ではない。

閑静な住宅街に建つ私の家に今住んでいるのは私一人。

母親は私が幼い頃に病気で亡くなり、私と父親の二人だけがこの家に残された。

その父親も今は仕事の事情でオーストラリアに住んでいる。

毎月私の口座には、私一人生活するには十分過ぎるほどのお金が振り込まれるが、父親からの連絡は一切ない。

父親にオーストラリアに行く事を伝えられた時も、まだ幼い私に言った言葉は「お前はこっちに残りなさい。」の一言だけだ。

でも康介の家族が私の事を家族のように支えてくれたので生活には困らなかったし、寂しさも感じなかった。

それからもう、康介にはお世話になりっぱなしで。

少し目を離すと危なっかしい私を本当の妹のように見守ってくれていた。

「ごめんね康介……」

彼女も作らずに私の事を見守ってくれている康介に、すごく申し訳ない気持ち湧いてきた。

「……お前が謝ることじゃねえよ。俺がしたいからそうしてるんだ。」

うん、と頷きながらも、納得のいかない面持ちでベッドに背を預ける。

康介はいつだってそうだ。

何かっていうと私のことを気にかけてくれて、どんな時でも私の傍

を離れない。

普段他の女の子には見せないような優しい表情も、私の前では当たり前のように見せる。

いくらなんでも、私だけのために自分の青春の大半を潰すのはいきすぎなのではないだろうか。

康介だって年頃の男。

そういうことに興味がないはずがない。

むしろ、あの容姿なら彼女の一人や二人いてもなんら不思議ではない。

今まであまり深く考えたことが無かったが、いや、考えないようにしてきたのかもしれない。

もしかしたら、康介の私に対する感情が恋愛感情かもしれないというのを。

もしそうだとしたら、今頭の中にある疑問が全て無くなる。

異様に私をかまったり、今まで一切彼女を作らなかったことも。

今朝の康介の怒り方も尋常じゃなかった。

それも私への心配と、嫉妬からくるものだと言えるだろう。

なんて、そんなことは有り得ないことだと分かっている。

でも、もし、もしも康介が私を好きだったら？

私はその気持ちには答えられない…

「真琴？」

「ぎゃっつー!!」

耳元で名前を呼ばれ、つい可愛いげのない叫び声をあげてしまった。

見ると、今まで後ろで小説を読み耽っていた康介が怪訝な顔をして私を覗き込んでいた。

「…さつきから何悩んでんだよ？」

「や、あの…」

まさか「もしかしたらあなたが私のことを好きかもしれないなんて考えてました」なんて言えるはずがない。

「？なんだよ、言えよ。」

キョロキョロと視線を泳がす私との距離を、ぐっと縮めながら言った。

いつもならなんともない距離なのに、妙なことを考えていた所為でなんだか落ち着かない。

「なっ、なんでもない！！！」

サッと立ち上がってそう言つと、ほんのり赤くなった顔を隠すように素早く自室へと戻った。

「…何だあいつ？」

ピピピピピピ…

本棚と机、コンポに鏡台、それとベッド。

無駄な物が無く片付いた部屋にいつものようにアラームの音が鳴り響いた。

5時45分。

私の朝は、普通的女子高生よりもちょっぴり早い。

ベッドから起き上がり数秒間伸びをすると、一階へ下りて顔を洗う。その後すぐにキッチンへ足を運ぶと、お弁当と朝食作り。

コーヒ一片手にニユースを見ながらのんびり朝食を摂ると、歯を磨いてから夜のうちに洗濯しておいた衣類をベランダに干す。

湿った洗濯物を干しながら窓越しに今だにすやすやと寝息をたてる康介を見やると、無遠慮に窓をガラリと開ける。

「康介、起きなよ。」

「んー……おお……」

これもいつもの光景だ。

洗濯物を干し終わるときちゃんとアイロンがけされたブラウスに袖を通す。

鏡台の前に座り、軽くメイクを施す頃には7時30分を回って頭もすっかり冴えている。

そして7時45分。

家を出て鍵を閉めると同時に隣の家からあくびを噛み殺す康介が出てくる。

「おはよ、康介。」

「はよ……」

本日も長い一日の始まりだ。

⌋
⋮
⌋

「……なあ、」

それを知ってか知らずか、康介が深い溜息をついた。

「そ、か……」

昨日考えていた事が妙に頭に焼き付いて、私は康介といつも通りの

会話ができませんでした。

そんな状態でなんとか学校に着き教室に入るやいなや、私の首に猛烈なラリアットが打ち込まれた。

「ぐえっ」つと苦痛の言葉を漏らしながらも、リアットをかました人物を見上げる。

打ち込んだ張本人は、一瞬私をじろりと睨むと、自らの腕を私の首に引つ掛けたままずんずん歩き始めた。

後ろ向きに引きずられる私は転びそうになりながらも必死に着いていくと、足を踏み込んだのはこの間の資料室。

部屋に入るなり私を解放すると、呆れた様な表情を浮かべた。

「は、賭け？」

私は暫時額に手を当てて何のことかと考える。

賭け…？黒王子との？
なん…

「…あ。」

そういえばこの間、どっちが先に相手を落とすかという妙な賭けをしたんだった。

ミルクティーの聖くんや康介のことに気をとられていてすっかり忘れてた…なんて言えない。

今のこの状況でそんな空気読まずなこと口走るなんて命知らずだ。

と 私に思わせるぐらい、黒王子を包む空気が重い。非常に。
敢えて言い表すなら、ずおおおおんって感じた。

「その顔…忘れてたな？」

「いや、忘れてたわけじゃ…。」

「嘘つけ！忘れてたろ！」

「いやいやいやそんなわけないじゃん。馬鹿だなあはは。」

「おま…明らか動揺してんじゃないか！！」

「し、してないよ！」

「まだ言うか！このやろっ」

「ぎゃっ！ちょ、こけ…」

る……

ガターン

はい、こけました。見事に。

背中にね。激痛が。それはもう息が出来ないくらいの。
しかも、？

仰向けに横たわる私に覆いかぶさるように倒れ込む黒王子。
と、扉を開けて呆然と立っている康介。

…Why?

何故康介がここに？

自分の状況を柵に上げてまさかの康介の登場に疑問を浮かべる私に、
驚愕の表情を向ける康介。

「…何してんの？」

眉を顰めていつもよりも格段と低い声で声を放った康介。
その声によりやく気付いた黒王子がガバツと身を起こす。

…と同時に、黒王子の胸倉を掴んだ康介がそのまま勢いよく壁に叩
きつけた。

「ちよっ…何してんの!？」

口元を手で覆って叫ぶ私をよそに、康介は再びドスの効いた低い声
を放つ。

「何してんだお前。」

「…何ってわかんない？」

「…は？」

「押し倒したの。」

その言葉を聞いた瞬間、黒王子の身体はガァン!という鈍い音と共

に積み上げられた机に叩きつけられた。

「ちょ、康介！？」

「お前も何簡単に押し倒されてんだよ！俺が言ったこと全然理解してねえじゃねえか！！」

物凄い剣幕で珍しく大きい声を張り上げる康介を前に、私は驚愕の表情を隠せない。

「…や、誤解だつて！」

「…誤解？」

焦ったように話す私に康介は眉を顰める。

「ちよつと揉み合つてたらそのまま転んじやつただけ！」

「揉み合つ…そんな状況になること自体おかしいだろ！」

ぎゃあっ！！

え、なんかしんないけど康介めちやめちや怒つてる！！

フッフッフと全身の毛を逆立てた猫のような康介が私を見据える。
なんで？え、なんで！？

そんなに怒る事なの！？

康介の怒りがいまいち理解できない私は、取り敢えず先ほど机に叩きつけられた黒王子の方に視線をずらしてみた。

これ以上康介と目を合わせてられなくなつて。

「真琴、今は俺と話してるんだらう？」

“目をそらすな” ってことですか。そうですね。
うつ…と思いつつも渋々視線を康介に戻す。

え、近くないですか？

え、さつきよりも随分と近くないですか？

私が視線をそらしている間に、康介はつかつかと歩み寄ってきていたようだ。

「…つかさ、なんでそんな怒ってんの？」

「…は？」

今でさえ私がこれまで見たことないぐらい怒りを露わにしている康介に対して、更に空気を読まない声が浴びせられた。

黒王子……。

心の中で深い溜息をつきつつ、二人のやり取りを見守る事にする。まあ少なくとも私も黒王子の言葉に同感だしね。

「…ふーん。もしかしてお前……」

「…？なんだよ。」

「こいつのこと、好きなんだろ？」

「………！！！」

その言葉と共に、昨日の事が鮮明に蘇る。

黒王子が発した言葉はまさに、昨日から私が頭の片隅にちらつかせていた事そのものだった。

………それにしても私がいる目の前で言わなくなっていていいじゃない！こゝ心の準備っていうか、いや、答えはNOと決まってるんだけど、でもさあ！

「な、なに言ってるのよーんなわけないでしょ？」

「……………」

「……………」

私がすかさず入れたフォローも虚しく、返ってきたのは静寂だけだった。

き……………きまずい……………！！

探るような瞳で康介を見据える黒王子と、その瞳に全く答える気のないかのように俯いて何かを考え込む康介。

…と、その間に挟まれて半目棒立ちの私。

なんだこの状況。実に不愉快きまわりな…「俺は……………」

「……………？」

「……………」

「俺は真琴の事を……………」

最後まで言い切らないうちに、康介の顔はカッと赤く染まった。

康介は軽く握った拳を口元まで持っていく。

そして焦ったような恥ずかしそうなやるせなさそうな…なんとも言えない表情を浮かべた。

それはもはや、肯定の意と取る他ない。

なんてことだ…。

そうとも知らず、私ってば無神経に彼氏作ってみたり兄妹宣言してみたり…。

いや、それよりも黒王子のおかげで私は康介をふらなければならぬという大きな問題を課せられた。

まったくなんてことをしてかしてくれただんだ黒王子め。

やんわりとごまかすように、傷つけないように断ろうか。

それとも潔くきっぱり断ろうか。

いや、きっぱりいこう。あやふやにしておくのが一番ダメだ。

「…ご、ごめん！」

「…は？」

いきなり頭を下げたあたしに康介が素っ頓狂な声を漏らす。

「ごめんね、康介…。あたし、やっぱり康介は兄妹みたいな存在っていうか…その、恋愛対象にはみれません！ごめんね！」

言った！エライ、あたし！

なんだか今年いっぱいやる気を使ったような達成感を覚える。

まあふられた側の康介にとっては失礼な話だけ…

「ちょっと待て、誰が好きって言った？」

「……え？」

康介以上に素っ頓狂な声をあげる私に、一度視線を落として一つ深い溜息を洩らすと、もう一度私に目を向ける。

「俺は頼まれたんだよ。真琴の親父さんに。」

「頼まれたって…何を？」

「真琴が寂しい時は側にいてやってくれ。真琴が危ない目に合わ

ないように見守ってやってくれ。”……あの時、俺は約束したんだ。

「あの時って？」

そう問いかけると、また少し頬を染めて言葉を濁す。

「……てたんだ。」

「え？」

やつのことでふり絞ったその声消え入りそうな小さな声で。
当然私の耳に届くはずもなく、私は耳に手を添えて身を乗り出す。
それに観念したかのように息を吐き出すと、艶のある黒い髪をわし
やわしやと掻き、口を開いた。

「俺…お前の事本当の妹だと思ってたんだ。」

「…はっ？」

「それで…真琴がオーストラリアに行くって聞いた時、親父さんに
言っただ。 “なんで兄妹なのに引き離すんだ” って。

そしたらあの人、困ったように笑ってから、じゃあお前に真琴を任
せる…って。」

あまりにも可愛らしい話に、思わず噴き出して笑ってしまう。

遠慮しながら笑うのを必死に堪えている私の横では、同じく黒王子
もお腹を抱えて「くつく…」と肩を震わしている。

あの康介にも、そんな可愛い時代があったなんて。

さすがの私でも、康介と本当の兄弟じゃないことぐらい知っていた。

まず住む家も親も違うのだから。

もしかして、私のお父さんとの約束を果たすために周りには冷たい態度をとるくせに私には優しい瞳を向ける今の康介がいるのだろうか。

爆笑している二人を前に、「だから言いたくなかったんだよ!」

って恥ずかしそうに髪をわしゃわしゃする康介がその頃の幼い康介と重なって、私は先ほどとは違う笑みを零したのだった。

幼馴染の真実（後書き）

文章力がなくてすみません（・ω・）

菓人形クン

「ふーん、なんだ。結局色めかしい話は一切無かつたんだ？」

つまらないなあ〜と言いながら聖くんはストローをガラガラと回す。わざわざパックからコップに入れ替えたいちごみるくに、スティック砂糖を2、3本流し込みながら。甘そうな…いや、きつとゲロ甘いであろう怪しい飲み物を事もなげにごくごくと味わっている。

「うえ…」

「な、面白くねえだろ？」

「そーだねえそこは実は好きだったって方が面白みがあるよね。」

え？なんの話って…

恐らくこの間の私と康介の話だろう。いや、絶対。

それより聖くんの飲んでいる怪しい飲み物に対する疑問はないのか？とか言っているうちに彼の口に更に甘そうなモノが放り込まれた。

「なんですか？それ。」

私は聖くんの手元を指差す。

可愛いラッピング用の小さな袋に、いくつかの可愛らしいお菓子が入っている。

「ん？ああ、これね。なんか靴箱に入ってたんだ〜」

「はあ…変わったお菓子ですね？」

「あ、食べる？はい。」

有無も聞かぬままはい、と口に放り込まれた。
口にふわりと甘い味が広がり、思わず笑みをこぼす。

「美味しいですね、なんてお菓子ですか？」

「マカロンだよ。食べたことないの？」

はい、と頷いてもふもふと味わう。

変わった食感だけど、クセになりそうな絶妙な美味しさで私をやんわりと包み込む。

今日は何故か私と黒王子と聖くんの三人でのランチタイム。

寒いからと渋る私は、半ば強制的に屋上へと連れ出されたのだ。

それにしてもなんだろう、この珍メンバーは。

「ふふ、可愛いね。もう一つ食べる？」

「なっ……」

反抗しつつも、はい、あーんとマカロンが差し出されるとぱくりと食べる。

美味しい。

ほんとに美味しい。

だから、勝手に私の頭を撫でている聖くんの手は見逃してあげます。

頬を赤らめて俯きながらもふもふ口を動かす私を、品定めするように顎に手を当てながら黒王子が見てくる。

非常に不愉快だ。

「なに。」

「…んーなんでもない。」

「なに、見てるじゃん。」

「…じゃあ聞くけど」

そう言つて胡座をかいた片膝に肘をついて挑発するかのような笑みをみせる。

「お前、聖のこと好きなの？」

「……………」

「…いやいやいや、何を言い出すんだこいつ。」

馬鹿じゃないのか？

いや、絶対馬鹿だ。

何でこのタイミングでそんな馬鹿な発想が出てくるのか理解不能だ。

「そうなの？」

なかなか口を開かない私に、しっとりとした瞳で妖艶な笑みを浮かべて囁く聖くん。

「いや、ないないないない。や、ほんと、無理。」

こんな美しい男と付き合つた日には周りの女がどんな行動に出るか……。
考えただけでもぞつとして背筋をぶるつと震わせる。

ふと視線を聖くんに戻すと、何か勘違いをしたのかひどくショックを受けた表情で俯いている。

ま、いつか。と空を仰ぐと、いい天気だなあと目を閉じた。

それからというものの、聖くんは昼休みの度に私達のところに来るようになった。

私と康介と黒王子と聖くん。

気が付けば一ヶ月ちよつとが過ぎていて、四人の顔が毎日屋上に揃うようになっていた。

毎日三人の美青年に挟まれている私は、はたから見れば逆ハーレムってやつなんだろうなと他人事のように思ったりもするが、A組の皆は今まで通りの態度で接してくれていた。だからこそ、気を抜いてたのかもしれない。

まあ普通に考えればそうだね。

だって康介、黒王子、聖くんだよ？

我が校の麗しの美男子トップ3とも言われるような人達だよ？

たとえ私にそんな気がなかったとしても、嫉みの対象にはもってこいの存在だ。

でもまさか、こういうことってほんとにあるのか。

「うつわゝすごいなあ。」なんて他人事のように呟きながら、自分の靴箱の中身をふむふむと物色する。

まあ今まで？

画鋏とかゴミとかはたまにちらほら入ってはいたよ？でもさすがにこれは…

「…怖。」

中にあるものをバラバラと掻き出すと、こんなに狭い靴箱に入りきったのが不思議な程大量の藁人形。

おまけにご丁寧にも私の顔写真付き。

五寸釘は刺さっていないものの、やはり気味が悪い。

「…女つてやだやだ。」

足元に落ちていた大量の藁人形をゴミ箱に捨てると、学校を後にした。

そもそもなんで私がこんな目に？

だって勝手に纏わり付いているのは奴ら…もとい、彼らなのに。

あーやだやだ。

…ん？なんか私偉そう？

かなり上から目線？

んー…取り敢えずあの三人とは少し距離を置こう。

うん、そうするべきだ。

「や、まこっちゃんだー」

「……」

たった今の私の決意をぶち壊すように相変わらず脳天気な聖くんが現れた。

「ん？なにになに？もしかして不機嫌だったりする？」

「…いや、大丈夫です。」

「そ？」

私が言葉とは逆に正反対に不機嫌な態度を現にすると、聖くんは不思議そうにミルクティー色の髪を揺らした。

「まこっちゃんこれから暇だったりするー？」

「はい、特に用事はないですけど。」

「じゃあさ、デートでもする？」

色っぽい顔で微笑みながらちゃっかり隣に並んで歩き出す。
この人は……。

「そんなに遊んではかりいたら彼女できませんよー。」

「彼女？」

「あ、もしかしてもう彼女さんいらっしゃるんですか？」

「……」

……あれ？

なんかまずいこと聞いたかなあ？

「あの、聖くん？」

「俺は本命の彼女なんか作る気ないよ。」

気のせいかな、聖くんの明るい表情が曇ったように見えた。

「……だって、一人に絞っちゃたら俺の事好きな他の女の子達が可哀相でしょ？」

ね？と色っぽさに軽さを足したように微笑んだ。

やっぱりモテるんだなあと感じつつ、相変わらず端正な顔におもわず見とれてしまう。

ふわふわなミルクティー色の髪と、同じ色の瞳。

白い肌に形の整った鼻、血色の良い唇。

黒王子はどちらかというとはつきりした顔立ちだが、聖くんは柔らかさを思わせる淡い顔立ちをしている。

まあぶっちゃけタイプだ。

だから黒王子を好きになるというよりはどちらかというと……

「何、もしかして見とれてる？」

す、と聖くんの顔が近付く。

うわぁ近くで見ても綺麗…。

何、この肌のきめ細かさ。

赤ん坊かて。

毎晩スキンケアしてこの程度の私を馬鹿にしているのかというぐら
いなめらかな白い肌に釘付けになる。

普通男の人つてもつと脂とか…ヒゲとか…。

肌の感触を確認するように、目の前の綺麗な顔に手を伸ばす。

——う……っわ……！！

す、すべすべ……！！

なにこれっすっごい気持ちいいっ……！！

はた、と我に返って慌てて手を引つ込める。

さ、さすがに失礼すぎるだろ私……！！

「う、ごめんな……」

——…え？

「……え？」

「…あの、聖……くん？」

頬をほんのり赤く染めた聖くんは、自分でも驚いたように目を見開く。

「顔……赤くないですか？」

「や、なんか普段こういうことしない人にされたらドキドキするね！」

そう言いながら、今だにほんのり赤い顔で楽しそうに笑った。
なんだかレアなものを見てしまった…。

その顔に釘付けになっていたので私は周りを全く気にしていなかった。

周りに下校途中の生徒がいるということを。
だからかな？

や、まあそれ以外ありえないんだけどね。

次の日登校してきた私は、そんなことを考えながら半目放心状態で靴箱を見つめていた。

相変わらず昨日で見慣れた藁人形クンが入っているのは変わらない。
しかし何故か、今日はたった一体だけ。

あれ、藁人形クン、お友達はー？

昨日は少しやり過ぎたって思ってくれたのかな？

なーんて。そんなわけないよね。

だって…

「刺さってる刺さってる」

藁人形クンを手に取ると、その左胸には無惨にも五寸釘が貫通していた。

「——…！？」

しかも、何、これ……血…？

五寸釘が刺さっている部分からは、血のような赤黒い染みが着いている。

藁人形クンを持った左手から全身に向かって一気に鳥肌が駆け抜け

る。

何よこれっ冗談になつてない！

私はそれをごみ箱に投げ捨てると、先に行ってしまった康介を追いつけた。

「元気ないね、まこっちゃん。」

今日もいつも通りの屋上でのランチタイム。

四人の間には、私が放つ不穏な空気が流れていた。

「何かあつたのか？」

黒王子も、めずらしく心配そうな顔を私に向ける。

言つていいのだろうか？

恐らく今ここで話したら三人とも責任を感じると思う。

しかし無駄に責任を感じさせたとしても問題解決にはならない。

うーんと首を捻らせると、やはり少し距離を取るといふ判断に辿り着いた。

康介はいいとしても、せめて水城兄弟とは少し距離を置こう。

「なんでもないよ。あたしそろそろ戻るね？」

私がお弁当箱を持って立ち上がると、じゃあ俺も。と康介が立ち上がった。

「何かあつたんだろ？」

屋上を後にするなり、康介が溜め息混じりに問い掛けてきた。

「んー…女って怖いよねえ」

至極小さい声で呟いて、乾いた笑みを浮かべた。
それに気付いたか気付かなかったか分からないけど、私の頭にくし
やっとな手を置いた。

各々の気持ち

真琴は焦燥した。

メロスは激怒した張りに真琴は焦燥した。

相変わらず問題の場所は靴箱。

今朝は藁人形クンを見ずにすんだので、朝から至極ご機嫌だった。そんな状態で一日を終え、下校しようとしていつものように靴箱を開けた時だった。

そこにあるはずのローファー ￥8500 が無くなっていた。なんてことだ。

藁人形は別に害は無いからまだ良かったものの、靴が無かったら家に帰れないじゃないか。

どうしたものかと首を捻るが、どうしようもないことぐらい分かっている。

流石に腹も立つてきて、苛ついたようにパンツと靴箱を閉めた。

「どうしたの？」

「……！」

いきなり背後から放たれた聞き覚えのある声に、ぎくりとして動きを止める。

「……」

んん…流石に靴がありませんんなんて言えないし…。

でも多分もぬけの殻な靴箱がつつり見られたよね…？

「ま・こ・と、ちゃん？何黙ってるの？」

うわ…なんか、怒ってる？

それでもまだ振り返れないでいると、背後で聞こえた溜め息の後にふわりと肩を捕まれた。

「ちょっとどいて？」

そう言っであたしをどかせてから空の靴箱を確認すると、私に目を向けた。

射るような、冷たい瞳で私を見据える。

いつものふざけた態度からは想像出来ないような冷たい表情を向けられて、何故か胸の奥がちくりと痛んだ。
なんたる…今の？

あたしが首を傾げていると、深い溜め息の後に聖くんは口を開いた。

「なんで言わなかったの？」

「ごめんなさい…」

「なんでか、って聞いているんだけど。」

あたしの謝罪に被せるように更にワントーン低めの声で投げ掛ける。

「迷惑…かけたくなくて」

「黙ってられる方が不愉快だよ。」

そう言っ自分の靴箱から運動靴を取り出すと、相変わらず無表情のままあたしに突き付ける。

「これ履けば？」

「え…！そんな、」

「サイズは合わないだろうけど、無いよりましでしょ？」

淡々と告げて笑み一つ零さずにその場を去った聖くんを呆然と眺めた。

今まで人にこんなに冷たい態度を取られたことがない分、胸の奥がひどく痛んだ。

「今日も聖くんいないの？」

「ああ…最近はずっと女はべらせて昼飯もそっちで食ってるみたいだぞ。」

「そっか…」

…チクツ…――

また、だ…

なんなんだろう、この気持ち。

あれから聖くんとあたしは、一切会話をしていなかった。

稀に廊下ですれ違う聖くんはいつも綺麗な女の人に囲まれてて、話しかけるに話しかけない。

聖くん自身もあたしに視線を向けることもなく足早に通り過ぎていくだけだ。

この間まではすごく優しく、お兄ちゃんみたいに思っていた分余計に辛い。

「ま、仕方ないか…。」

そっぽつりと呟くと同時に予鈴が鳴り響いた。

——…けど、

だけど、せめてあたしを避ける理由ぐらいは知りたい。

だって、普通はそうでしょう？

今まで妹みたいに可愛がつてくれて優しい瞳を向けてくれてた人が、いきなり自分を避けだしたら理由を知りたくなるでしょう？

何も言われずにただ避けられて、はいそうですかなんて言えない。生憎だけど、あたしはそんなに素直じゃないし心も広くない。

とにかく、今の現状には少なからず不満を持っている。

苛々する。すぐく。

「……ふう」

深く息を吸い込み、ゆっくりと吐き出す。

そして、意を決して屋上の扉を開いた。

キィ……

「…今授業中だけど？」

座り込んで両手を後ろに付いている聖くんは、無表情のまま話す。

「俺は涼に呼び出されたはずだけど？」

「…ごめんなさい。あたしが頼んで呼んでもらいました。」

あたしの頼みに黒王子は少し驚いたものの、すんなり協力してくれた。

” 聖には深入りするな ” という言葉を添えて――…

「そ。で、何か用？」

「聖くん、あたしのこと避けてますよね？」

「まあそつだね。」

まるで当たり前のことだとしても言うような言葉と表情がまた、あたしの心に僅かな痛みを与える。

「何で避けるんですか…？あたし、何かしました？」

じわりと目元が熱くなるのを感じながら、なんとか平然を装って問い掛ける。

そんなあたしを見透かすように冷たい視線を投げ掛けると、ふっと蔑むように笑みを漏らして声を放った。

「そんなの真琴ちゃんと関わりたくないからに決まってるでしょ？」

「――…っ！」

あっさりと告げられたその言葉に、身動きが取れなくなる。
今まで強張っていた全身の力が一気に抜けて、体中の熱が目元に集

まって来るのを感じた。

嫌われて、いたんだ…

関わりたくないって思うぐらい、あたしのこと嫌ってたんだ…
お兄ちゃんみたいなんて思ってたの、あたしだけだったんだ…

「そ…ですか、」

溢れ出しそうな涙を必死に隠しながら震える唇で短い言葉を紡ぐと、
ゆっくりと屋上を後にした。

「…何であんなこと言っただんだよ？」

真琴が去って行った方を見つめながら、涼が物陰から姿を現す。

「…俺の本心だよ。」

同じように聖もその方向に目を向けてぼつりと呟く。

「お前あいつのことあんなに気に入ってたじゃん。」

「真琴ちゃんは…百合に似てる。」

そう言っただけ視線を地面に落とすと、額に手を当てた。

「だから関わったら駄目なんだ…絶対に、」

「んなの分かってただろ最初っから!!」

聖の胸倉を掴んで声を張り上げると、驚いたように顔を上げて再び視線を落とした。

「お前から近付いたんだろ?こうなるのが分かってて、それでもお前の意志で関わったんだろーが!」

「……っ」

「お前さえあいつに関わらなければ、あいつはあんな顔しなくて済んだんだよ!傷付かずに済んだんだ!」

「じゃあお前はどんなんだよ!」

聖は涼の手を振り払うと、普段出さないぐらい大きな声を張り上げた。

「俺はもう絶対に同じ過ちは繰り返さない。」

「俺らが傍にいたら……!あの子も絶対に傷付けられる!」

「あの時みたいに……っ」と聖は悔しそうに顔を歪めて、地面に向かって声を振り絞った。

「お前みたいな責任放棄みたいな護り方、俺はしない。」

そう言つて冷ややかに聖を見下ろすと、静かにその場を後にした。

「…泣くな。」

「…泣いて、ない。」

康介にバレバレの強がりを見せながら、あたしは顔を埋めた枕を盛大に濡らしていた。

今まで人間関係でこんなに傷付いたことが無かったのは、やっぱり康介が護ってくれてたからなのかなあ？

なんて事を冷静に考えてみたものの、溢れ出る涙はなかなか止まってはくれない。

「優しかったのに…」

「……」

「あたしにとつては、もう、一緒にいるのが当たり前で…っ」

嗚咽で途切れ途切れになりながらも、ぼそぼそとか弱い声を紡いでいく。

「ほんとの、お兄ちゃんみたいで…、一緒にいたら、安心して…っ」

「それなのに、あんな…あんな冷たい目でっ」

少し言葉を止めて鼻を嚙ると、恐らく涙とか鼻水とかでぐしゃぐしゃであろう顔を康介に向ける。

「ね、康介…」

呼びかけると、下を向いていた康介の視線があたしに向けられる。

「も……前みたいな関係には戻れないのかなあ……？」

自分の、ひどく弱々しい声により一層哀しみが込み上げてくる。

「……あのさあ」

ギシ……

康介は溜め息を一つ落として隠しきれない苛立ちを含んだ声を漏らすと、ベッドに片膝を乗せてあたしの目の前と肩の横に両手をついた。

「真琴には俺がいるだろ……」

少し語気が強かったのは気の所以だろうか。

あたしは少しきょんとした後、ふふつと堪えきれない笑みを漏らす。

「康介、ヤキモチ。大丈夫だよ？」

「え……？」

「あたしにとつて一番のお兄ちゃんは康介だから。」

「……当たり前だ。」

そう言つて康介は優しい笑みを口元に浮かべた。

思わぬ康介のヤキモチに嬉しくなつてすっかり涙も止まったあたしは、顔を洗つてくると告げて一階へと向かった。

「お兄ちゃん…か。」

真琴のいなくなったベッドを見つめながら、康介は自分の言葉にちくりと胸を痛めた。

「……何やってんだ俺……」

哀しみに染まった真琴の瞳を見た時に俺の中に出てきた感情は、妹を思う兄なんかじゃなかった。

今まで真琴に対して感じていた感情とは別の……

「は……ありえねえ。真琴だろ？」

絶対ない、と呆れたような表情で呟くと、戻ってきた真琴を”酷い顔だ”と笑ってからかった。

危機

「こら！あんた達いつまで寝てるの！」

いい加減起きなさい！という言葉と共にあたしと康介は叩き起こされた。

うつすら目を開けてゆっくりと起き上がると、どうやらここはあたしの部屋で間違いないようだ。

同じベッドで仲良く眠っていたであろうあたし達の傍らには、腰に手を当てた康介のお母さんが立っている。

「んー…あれ…おばさん、なんでここに…？」

「康介がいつまで経っても起きてこないから、ベランダ伝って様子見に来たのよ。」

伝うと言ったってあたしと康介のベランダの柵の間は少なくとも物差し3本分はあるだろう。

どんだけ元気なんだ奥村美智子（45）。

そんなことを考えてる間も、元気な美智子は未だにすやすやと寝息を立てる康介の脇腹を蹴り上げていた。

「いい加減に起きなさい！つたく、年頃の乙女のベッドに潜り込むなんて何考えてんの変態息子！」

「げぼっ……乙女？誰が？」

.....。

「...そうね...乙女は言い過ぎかもしれないわね。」

なんだその絶妙な沈黙。

失礼な親子だ。

二人して残念そうな顔でこっちを見るな。

「あっそうだね。今日ね、真琴ちゃんの分も朝ご飯作ったの。早く来なさいよ?」

そう言ってふふつと笑うと、おばさんは踵を返してベランダへと消えていった。

「ほら行くよ、康介。」

もそもそと布団に潜ろうとする康介を引っ張り出し、あたしもおばさんの後を追った。

康介の家のダイニングへ行くと、ふわりと漂う甘い香りが食欲を刺激した。

テーブルの上には、きれいに焼きあがったホットケーキが置かれている。

「やったっホットケーキ!」

一気にテンションが上がって目を輝かせるあたしの横では、康介が

ふつと笑みを漏らす。

ああ、幸せだなあと笑みを一層深めたあたしの頭を康介がふわりと撫でた。

「今日二人とも風邪で休むって学校に連絡しておいたから、久々に二人で出掛けてきたら？」

あたし達の前にコトツとコーヒーを起きながらおばさんは、せっかく良い天気だしね。と付け加える。

今日はさすがに聖くんと顔を合わせたくなかったあたしは、おばさんの勝手な行動にもほつと胸を撫で下ろす。

そんなあたしを察したのか、康介もおばさんを咎めようとはしなかった。

「そつだな…街にでも出るか？」

飲んでいたコーヒーから顔を上げると、そう言いながらホットケーキを頬張る。

「うん！そろそろ夏服も買いに行かなきゃね。」

その後ほぼ同時に朝食を食べ終えたあたし達は、連れ立って六駅先の繁華街へと出掛けて行った。

「珍しく聖が来たっていうのに……あいつら二人してフケやがって。」

二人が楽しんでいる頃、水城兄弟は二人仲良く屋上ランチをしていた。

「……真琴ちゃん、きつともう許してくれないだろうな……。」

食べ終えたパンの袋を放り投げると、近くの壁にうなだれる。そんな情けない兄を見ると、涼は呆れたように溜め息を零した。

「二人で何してんだろーなあ」

「……」

「ナニしてるのかもなあ」

「……言つてて自分が苛々するのやめたら？」

聖を挑発するように言いながらも、右手であんぱんを無惨な姿に握り潰している馬鹿な弟を見ながら苦笑する。

「これはっ……ちげーよ！知らなかったのか？あんぱんは潰した方が旨いんだ！」

そう言つてもはやパンとは思えないペラペラのそれを無理矢理口に押し込む。

案の定喉に詰まらせて苦しそうに咳込みながら傍のパックコーヒーに手を伸ばした。

「っ……っーかなんで俺が苛々するんだよ。意味わかんねえ」

「……さあね？それは涼にしか分かんないんじゃないかなー。」

「……つとにムカツク奴。」

ぶすつと顔をしかめると、口の中にしつこく残るあんこを手元のコーヒードリで流し込んだ。

「そろそろ帰らないとね……」

服を買ったり美味しいご飯を食べたりと、文句なしに充実していた時間を惜しむようにオレンジ色の空を見上げる。

「……楽しかったか？」

康介の問いに「うんっ」と微笑むと、駅への道を歩き出した。

他愛もない話を康介と交わしながら足を進めて行くと、程なくして駅が見えてきた。

この駅の周辺はやけにカップルが目立つなあ……。

なんてことをぼーっと考えながら、ふと広場にある噴水に目を向けた。

男女共にオシャレでいかにも”お似合い”なカップルが、お互いに手を繋ぎ、そしてその唇を重ねた。

他人のこういう場面を見るというのは、あまり良い気分がしないな……。

「あーあ。こんなところでキスなん……か……」

言葉が途中で途切れたのに気付いたのか、康介が振り返る。

そしてあたしの視線を辿った直後、あたしの体はその胸に抱きしめ

られた。

きつく、きつく、あたしの視覚と聴覚を奪うように力強く抱きしめられる。

あたしの腕はそれに答えることもないままだらりと垂れ下がり、頬には一筋の涙が流れた。

「――！！」

刹那、あたしは物凄い力で康介の腕から解放された。

見開かれたあたしの目に映るのは、眉を顰めた聖くんの姿。

「何、泣かせてんの？」

泣かせてる？

康介が？あたしを？

「大丈夫……？」

そう言ってあたしの頬に触れる聖くんの手を、康介が掴む。

「…触んな。」

聖くんに鋭い目を向けながらあたしの腕を掴むと、そのまま駅へと歩き出した。

「気まずい…」

昨日の今日で、休みもせず登校してるあたし、エライ。

…昨日学校休んだ奴が言うことじゃないか。

結局あれから無言で帰宅して、ベランダの窓も閉めきって、朝も一人で登校して。

康介とも気まずいんだよね。

だってなんか…あんな後に顔合わせ辛いつていうか…。

「ねえ」

突如聞こえた声にハッと我に帰り、振り返る。

と、そこには8人程の凄い形相をした女生徒が立っていた。

ああ、あの三人の誰かの追っかけだろうな、とすぐに察しがついた。

「ちょっと来なよ。」

「…わざわざ着いて行く馬鹿がいると思う?。」

……まあ、抵抗はしたものの八対一で勝てるはずもなく。
あたしはあっけなくずるずると連れて行かれてしまった。
そして旧校舎の薄暗い教室に、あたしだけ放り投げられた。

「…っ何すんのよ！」

転んだ拍子に擦りむいた手の平を摩りながら女生徒達を睨むと、リ
ーダー格っぽい女が嫌な笑みを浮かべた。

「あんたでしょ？ いつも聖達に付き纏ってんの。」

「別に…付き纏ってるわけじゃ、」

「そんなに男が好きなら、存分に遊んで貰ったら？」

”じゃあね”とねっとりとした声で言って閉められたドアが施錠さ
れる音が聞こえた。

それと同時に、暗い教室の奥からぞろぞろと十数名の男が姿を現し
た。

この…学校の生徒じゃない…！

あたしの目の前に現れた男達は全員、思い思いの私服を身に纏って
いた。

年齢も、どう見たって高校生ではない。

そう思ったのと同時に今まで感じたことのない悪寒が背筋に走った。

——異常だ…

全員、目つきがまともじゃない。

ただの脅しなんかじゃなくて、本気なんだ。

「声、あげたかったらあげてもいいよ？」

その言葉と同時に無数の手があたしに絡みついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4867y/>

王子の落とし方

2011年12月21日18時47分発行